

赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

NEWS

3

March 2026
#1030

赤十字NEWS
オンライン版はコチラ



特集 ▶ P.2

3.11から15年目の“被災追体験”

「命を守るために、 できること」 JRC語り部LIVE

JRC語り部 LIVE より



隣接する小学校の
児童と共に
避難した。

岩手県釜石市出身 紺野 堅太さん

地震発生後、
昨日まで遊んでいた
友達/学校/町と離れ離れ
になった。

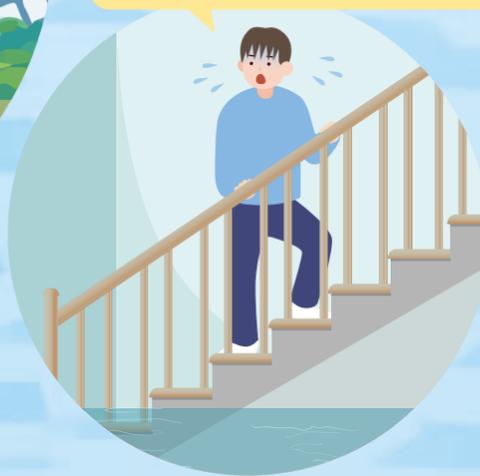
福島県富岡町出身 秋元 菜々美さん

想定を超える範囲と、高さに
津波が到達した。



自宅にも水が来た。
逃げ遅れて、家ごと流された。

宮城県石巻市出身 阿部 任さん



C
O
N
T
E
N
T
S

TOPICS

その判断は、「バイアス妖怪」の影響かも…
避難をためらわせる心の働きとは? P.4

連載

海外派遣の現場から インドネシア編 P.4
けんけつのいま P.5

AREA NEWS

[山形] 1本につき71円が小児がん支援に
献血ルームでレモネードスタンド
[神奈川] ひな人形で病院に笑顔を
ボランティアによる
大階段のひな飾り/他 P.6

WORLD NEWS

ウクライナ・リハビリ支援
日本のハンドブックがもたらす希望 ... P.8

Present!

日赤の車載用防災セット

プレゼント!
10名様



詳しくはP.7をCheck! ▶

SPECIAL FEATURE

3.11から15年目の“被災追体験”

「命を守るために、できること」JRC^{*1}

2011年3月11日に発生した東日本大震災から今年で15年。震災当時、生まれて間もなかった子どもたちが中学生や高校生になる歳月が流れました。今回は、日赤宮城県支部が他団体と協力して実施する「JRCオンライン語り部LIVE」に密着。当時の中学生が東日本大震災を生き延びた体験を、現在の中高生はどのように受け止めるのか。皆さんも「被災のリアリティ」を生徒たちと一緒に感じてください。

*1 Junior Red Cross: 青少年赤十字

LIVE 1



岐阜県 恵那市立明智中学校の生徒たち

語り部 紺野 堅太さん
愛知県 在住

2011年3月11日
地震後の避難行動



レポート ▶ 語り部LIVEの様相

多くの命が助かった
釜石の避難行動
大切な3つのこと

この日、語り部として登場したのは、中学校1年生のときに岩手県釜石市で被災した紺野堅太さん。釜石市では、震災によって994人が亡くなり、152人が行方不明^{*2}となりましたが、紺野さんが通っていた釜石東中学校と、隣接する鶴住居小学校にいた生徒ら約570人は、全員無事に避難することができました。海から200メートルしか離れていない場所にいながら、小中学生の迅速な状況判断と避難行動がもたらしたこの出来事は、「釜石の奇跡」としてメディアなどでも注目されることに。しかし、当事者である紺野さんは、自分は命が助かった一方で、大切な人が犠牲になった悔しさから、「奇跡」という美談で終わらせない、生き延びるためのメッセージを発信しています。

しい揺れ。私たちの中学校では、震災前から、津波を想定した避難訓練をしていました。「地震が起きたら、まずは高台に逃げる」。私たちは訓練通り、揺れが止むと教室から駆け出し、校庭に飛び出しました。ところが、校庭には私たち以外に生徒がおらず、一瞬パニックに。でも気がつきました。教室の下階の2年生、3年生は、すでに避難路を走って逃げていたのです。これが「津波でんでんこ^{*3}」。大きな地震が来たら、一人で高台に逃げる、という釜石に古くから伝わる教えです。我に返り、頭に入っていた第一の指定避難場所に向かいました。けれども、この第一避難場所、想定外のこと。第一避難場所の裏山で土砂崩れが起きていました。「過去の地震でも崩れたことがない」という近隣住民の話に、自分たち中学生も「危ないのではないかな」と先生に直訴。そこから小学生と一緒に第二避難場所へ。そしてそこで、初めて津波を見ました。先程までいた学校や町が黒い波にのみ込まれていたのです。先生の呼びかけで我に返り、一度も訓練で行ったことがない第三避難場所へと移動。

のおかげで迷いなく逃げ続けた、これが、私たちが助かった理由です。**大切なことを3つ、整理します。**1つ目、日頃からハザードマップを知っておくこと。2つ目、徹底した避難訓練。3つ目が、「津波でんでんこ」。しかし、この3つを守っても、実際の災害時は、想定外のことやトラブルが発生します。私たちの町でも、当初の想定を大幅に超える区域にまで津波が到達しました。高台の指定避難場所に逃げ込みながらも、街がどんどん津波にのみまれていく様子を見て、さらに上へ上へと避難したことが、多くの命が助かる結果につながりました。ハザードマップを頭に入れていても、ハザードマップを信じすぎない。このことも、重要なポイントです。私は、逃げながら、町が黒い波にのみ込まれ、車が走るような速さで家々が流されるのを目撃し、もう自分も助からない、家族とももう会えない、という絶望が頭に浮かんだのを覚えています。それでも、助かることができました。命があれば、家族と会えます。それを信じて、逃げましょう。備蓄をする、防災のためのいろいろな準備をする、そういうことも大事な備えではありますが、命を守るために、この3つの行動を、大切な人に伝えてください

「地震が発生したとき、私は校舎の3階にある自分のクラスで放課後の部活に行く準備をしていました。そこへ、突然震度7の揺れが。野球部で足腰に自信があった私でも立ってられないほどの激

^{*2} 令和7年3月10日付、総務省消防庁災害対策本部資料より
^{*3} 「それぞれに」を意味する言葉「でんでん」に、東北地方の方言「でん」がつけられたもの

▶ レポート 語り部LIVE

レポート ▶ LIVEに参加してみよう

宮城県支部 担当者の声



日本赤十字社 宮城県支部 事業推進課 鈴木 和さん



JRCオンライン語り部LIVEは、東日本大震災の記憶と教訓を未来につなぐため、震災から10年を迎えた2021年から、語り部の皆さんの「災害から自分の命を守り、家族などまわりの人の命を守ってほしい」という大切な思いを全国の子どもたちに届けています。このプログラムは、LIVE配信だからこそ知ることや感じるものがたくさんあり、命の大切さについて深い学びがあります。参加した子どもたちからは、「命をもっと大切にしたい」、「家族や友達と過ごす時間を大切にしていきたい」、「家族で話し合ったら災害が起きたときの準備を進めたい」といった感想が寄せられ、命を大切にすることや実際の行動にもつながっていると感じます。今後も一人でも多くの子どもたちに、語り部の皆さんの大切な思いを届けていきたい。そして、語り部LIVEに参加した子どもたちが災害を乗り越える力を身に付け、災害発生時にまずは自分やまわりの人の命を守る行動をとることを担当として願っています。JRCオンライン語り部LIVEの開催案内については、日赤宮城県支部のWEBサイトから確認いただけますので、宮城県内の学校、そして、全国のJRC加盟校からの参加を心からお待ちしております。

※2025年度の語り部LIVEは終了しました。次回の開催は2026年秋頃に支部WEBサイトでご案内します



恵那市立明智中学校3年生 半崎 結衣さん

命を守る行動を家族にも共有して 避難場所をもう一度確認したい

この地域のハザードマップでは、坂の下にある小学校の体育館が避難場所なのですが、今日の話聞きながら「土砂崩れが起こったときには危険なのかな?」と心配になりました。「命があれば会える」という紺野さんの言葉から、会えることを信じて、同じ中学に通う妹や家族と避難の計画を話したいと思います。東日本大震災について何となくは知っていたけれど、語り部ライブで、体験された方の話や当時の映像を見せてもらい、あの災害を詳しく知ることができてよかったです。



恵那市立明智中学校3年生 伊藤 成人さん

防災士の資格を持っていたけれど、改めて防災学習の大切さを実感

僕の姉が防災士で、家族全員の防災意識が高く、僕も防災士の資格を取得しました。東日本大震災のことは親から聞いていたのですが、僕たちの地域には津波の心配はなく、その脅威の実感が湧きませんでした。でも、今日の語り部ライブで映像を初めて見て、びっくり。紺野さんは、避難訓練をしていても訓練通りにはいかなかったと話されましたが、それでも率先避難という命を守る行動ができたのは、その意識が備わっていたからだと思うので、やはり防災学習は大切だと感じました。



恵那市立明智中学校 梶山 真理先生

子どもたちの防災意識を高める 防災教育の機会を大切に

明智中学校は毎年、語り部ライブに参加し、防災学習も年に数回実施しているのですが、生徒たちの防災意識が育っているのを感じます。他の学校では、年に1回程度の防災学習で感想を聞くと「自分も気を付ける」といった曖昧な声が多かったのですが、この学校の生徒は「家に帰っておじいちゃん・おばあちゃんに伝えたい」と、自分以外の人も助かる方法を自然と考える。これは繰り返しの防災学習の成果だと。あの震災をほとんど知らない子が多くなっていくので、こういった機会を増やしていくのが大切だと思います。

「語り部LIVE」とは



「3.11 メモリアルネットワーク」と日赤宮城県支部がタッグを組んで、被災を経験した語り部たちの生の声を全国のJRC加盟校の児童・生徒たちに向けて発信する取り組み。語り部の体験談を通して、児童・生徒たちが災害は自分にも起こりうるのだと「気づき」、どう行動すべきか「考え」、備えを「実行する」ための機会として、2021年から続いている。語り部には、震災によって我が子を亡くした親、原発事故によって住み慣れた町から離れなければならない中学生など、さまざまな状況下で3.11を体験した宮城、岩手、福島の被災者が名を連ね、命を守る行動と備えの大切さを参加者と共に考える時間を提供している。

LIVE 2 「自分は災害時の“ダメ”なお手本 非常時の状況判断の難しさを伝える



宮城県 阿部 任さん

宮城県石巻市で被災した阿部さん。震災当時、高校1年生で、地震が起きたときは実家で祖母と2人。津波の警報が出ても裏山へ避難せず、その結果、家ごと津波に流され、9日後に救出。「奇跡の救出」と報じられましたが「自分が判断を誤ったせいで、迷惑をかけてしまった…」と後悔を残した阿部さん。語り部として、命を守る行動の大切さを伝えます。

宮城県 仙台育英学園高等学校 生徒の声

慢心の危険性と避難訓練の大切さを学ぶことができました。自分も後悔することのないよう、備蓄品の準備や避難経路の確認、避難訓練などで備えて、いざというときに迅速に適切な判断をとれるようにしたいと思いました。(2年生・中村凱さん)

宮城・岩手・福島、10代で被災した語り部の経験をオンラインで紹介。

「語り部LIVE」のレポートはこちら



T P I C S

その判断は、「バイアス妖怪」の影響かも… 避難をためらわせる心の働きとは？

バイアス妖怪たちに
惑わされるな！

2月20日から、新たなコンテンツを追加した「ACTION! 防災・減災」キャンペーンの特設サイトが公開されました。

今年のテーマは、「気象災害時における適切な避難行動」。気象災害の発生時、私たちの避難行動を遅らせてしまう「心の働き」に目を向けること。身を守る知識があっても、避難はしない——その背景にある迷いを、見えるかたちに例えて伝えています。

サイトに登場するのは、人の判断を惑わす「バイアス妖怪」たち。

「前も大丈夫だったし大丈夫」と過去の経験にしがみつかせる正常性バイアス妖怪カコフリカエル。周囲の様子ばかり気にして決断を遅らせる同調性バイアス妖怪キョロキョロ。根拠なく安心させ続ける正常性バイアス妖怪のだいじょーばあ。そして、「ワタシダケは大丈夫」とささやく正常性バイアス妖怪のワタシダケ、などなど…。

また、特設サイトでは、上白石

萌音さんが出演するWEB CMも公開。大雨災害の危険が近づいている状況で、人々の背後に妖怪たちが現れ、迷いが生まれる一瞬を可視化します。災害は突然起こりますが、自分自身を危険にさらす存在は、いつもあなたのそば(心の中)にいる、そんな気づきを投げかけます。

備えとは、物や知識をそろえることだけではなくありません。迷いに気づき、災害時に迷わず動ける自分となっておくこと。特設サイトでは、妖怪たちと共に自分の心の働きを見つめ直す体験ができます。この機会に、ぜひアクセスしてみてください。



迷いが生まれるその瞬間、バイアス妖怪がささやく…。(上白石萌音さん出演のWEB動画より)



カコフリカエル



キョロキョロ



だいじょーばあ



ワタシダケ

あなたの心にもひそむ妖怪を、
特設サイトでチェック！
<https://www.jrc.or.jp/lp/save365/>



Vol.4

海外派遣の現場から

インドネシア編

世界の現場で出会った人々とのふれあい、その土地でしか感じられない息づかい。赤十字の国際要員たちが見た、笑顔や驚き、そして心に残る瞬間をお届けします。



リポーター
越智 かよ子 さん
おち

「3.11」後に見つけた、海外救援の道

私が海外に派遣される「国際要員」を志した原点は、東日本大震災でした。震災発生時の私は、日赤宮城県支部所属。被災範囲が広く、支部は全力で被災者支援に動きましたが、より被害が深刻な沿岸地域に活動の比重が傾き、仙台を含め内陸部の方からは「あなたたち、何していたの？ 姿を見なかったけど」と、厳しいお言葉が。震災後に活動資金*募集の担当になり、お願いに回るも資金が集まらず、立ち尽くすこともありました。

そんな中、国際赤十字のネットワークを通じ、海外から多くの救援金が届きます。その支えによって、復興支援を年単位で続けることができました。また、宮城県支部には国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)のスタッフが何度か訪れましたが、当時の私は英語が話せず、通訳を介して説明をする中で、「千年に一度」と言われる災害と、その対応について、自分の言葉で伝えたい——そんな思いが、胸に深く刻まれたのです。震災後の苦しい数年間、支部の活動を国際赤十字に支えてもらったことで、「国や地域を超えて助け合う仕組み」に少しでも貢献したいと考えるようになり、加えて、「説明責任を果たし

たい」という気持ちで、語学や国際要員スキル習得の原動力になりました。

海外での活動を通じて、気づかされたことがあります。インドネシアで防災強化事業に携わった際、インドネシア語の打ち合わせには翻訳機をフル稼働させ、英語が苦手なスタッフとも丁寧に思いを伝え合いました。互いの理解が深まる中、夜遅くまで受益者のために資料作りをする彼らの姿を見て、「赤十字の支援は、これでもいいのだ」と感じました。被災された方々に最も近い立場で考え、行動を積み重ねること。外から見えない活動の中にある本当の価値を再認識しました。今後もこの思いを持って活動を続けたいと思います。



災害リスクの調査に訪れたインドネシアの学校にて(右から2人目が越智さん)

*「義援金」の寄付は全額を被災地の義援金配分委員会にお送りいたします。日赤の事業は皆さまからの「会費・寄付金」による「活動資金」に支えられています。

けんけつのいま

支える命、つなぐ未来。 vol.12

このコーナーでは、献血を推進するために各地で行われているさまざまな取り組みを紹介していきます。



Promoting
Blood
Donation

あれから15年。東日本大震災の経験を、いま現場で

2011年3月11日、14:46。

青木利昭さん(現・東北ブロック血液センター事業部長)は、献血会場となっていた総合病院で献血の受け付け業務を行っていました。その病院は多賀城市内にあり、海まではおよそ1キロ。そのときのことを、青木さんは振り返ります。

「突然、立ってられないほどの大きな揺れが。まず頭に浮かんだのは、献血に協力してくださいという方々を守らなければ、と」

右に左によろめきながら、激しく揺れているバスに何とかたどり着くと、車内は上下に跳ねている状態。看護師や医師が献血者に覆いかぶさるようにして、必死に献血者の体を押さえていました。

やがて揺れは収まりましたが、当然、献血は中止。青木さんは、献血バスの職員たちを撤収させ、自分は地震によって大混乱が起きている病院に残ることを決断します。このときとっさに「山のルートで帰ってください」という指示が青木さんの口を衝いて出ました。

「妙な胸騒ぎがしたんです。献血バスで血液センターへ戻るルートは、通常なら海沿いの道を利用します。山側から戻ると、かなり時間がかかる。でも直感で、海はダメだ、と感じたのです」

もしも、献血バスが普段どおり海沿いの道に戻っていたら——その道は確実に津波にのみ込まれてしまうルートでした。

病院に残った青木さんを待ち受けていたのは、想像以上の混乱でした。スプリンクラーは誤作動、床には物品が散乱。そこへ地域の避難者が次々と駆け込んできます。そして、大津波警報発令。青木さんは病院職員と一緒に、1階にあったカルテや薬剤を2階へ。目まぐるしく対応に追われる中、ふと外を見ると、病院の前の道を、次々と車が海方向へ向かっている。青木さんは病院を飛び出し、車の前に立ちふさがり、「この先には行かないで！」と大声を張り上げました。

運よく、青木さんが着ていたのは、赤十字のジャンパー。左胸に赤十字マーク、背中には大きく赤十字のロゴ。その姿のおかげか、車は方向を変えてくれたそうです。「救護に来たと思われたみたいで、『赤十字さん、ずいぶん来るの早いね』と何人もの方に声をかけられました」。

そこへ、近くの自衛隊駐屯地のスピーカーから「波が来るぞ!」という声が…。まさにその音声がかえった瞬間、青木さんは、どうしても海方向に進もうとする女性を説得中でした。「心配なのはわかる!大切な人は無事だと信じて、今はあなたの命を守って!」。強引に車から降りして腕を引き、半ば引きずるようにして病院へ。そうする間にも川から氾濫した水がひたひたと足元に迫り、水の中を必死に歩きました。

間もなく病院の1階は水没。病院のエントランスのガラス扉をバリーン!と音を立てて突き破り、津波が流れ込みます。大きなコンテナまで、病院の目の前まで流されてきました。病院には700人以上が避難。重油混じりの水で濡れた方も多く、服を脱がせ、毛布やシーツ、タオルで体を包み込みました。暖房はなく、物資も十分ではありません。

「毛布が足りない。食料もない…助けを待つのではなく、自分たちから動こう」

翌日の午後、水位が胸の高さまで下がったところで、青木さんは救助を要請する役に志願します。周囲の人に協力してもらいながら病院にあった大きなビニール袋を何枚も重ねた中に体を入れ、水の中を歩いて、水が引いた高台へ。さらにそこから、4キロほど先にある多賀城市役所の災害対策本部へ向かいました。

途中、派出所を発見。中にいた警察官に赤十字の職員であることを伝えて災害電話を借り、血液センターにも連絡。派出所を出て市役所に



病院の駐車場で水没し、屋根だけが見えている器材運搬車

着くと、担当者に必要なことを伝えて引き返します。病院に戻ると、今度はストレッチャーで水の上を歩く通路を作り、避難者を一人ずつ誘導しました。「ここにいる人を全員、無事に送り出したい」、そう願い、病院職員と一緒に被災者のサポートをしているところに、知らせを受けて飛んできた血液センターの同僚が到着。お互いに感極まり、思わずハグをして、それぞれの無事を喜びました。青木さんは同僚の車で血液センターに帰る間、ずっと「怒られるよなあ」と落ち込んでいました。自分と一緒に病院に残した器材運搬車を、大事な機材もろとも水没させてしまったので。ところが、血液センターに帰った青木さんを待ち受けていたのは「青木、よくやった!」。仲間命を守り、病院に残って多くの人を支えたことを、上司も同僚もたたえてくれました。

震災によって、宮城県内の献血業務は全面停止しましたが、全国の血液センター職員が宮城へ派遣され、現地職員と協力して血液供給を継続しました。道路に不慣れな他県職員には地元職員が同行し、供給ルートを再構築。さらに、山形センターの機器を借りて宮城の献血データ処理を代行するなど、血液事業が全国一丸となり、宮城の血液医療を支えました。4月中旬、検査や製剤業務が再開。5月1日には移動採血も再開し、献血ルームには、多くの献血協力者が押し寄せたそうです。

震災から15年がたった今、当時のことをあまり覚えていない世代の職員も入社するようになりました。「どうしても目の前の業務に追われてしまいが、震災の話もちゃんと伝えていかねば」。3年前から、青木さんはチームを組んで東北六県を巡り、災害対応強化のために各地の献血現場を訪ねているそうです。それぞれの業務の流れを見ながら、有事の際にどう動くか、何が課題になるのかを、その現場の職員と話合っています。「私もあと1年ほどで定年です。赤十字の中にいる間は、赤十字に震災の経験を継承し、定年退職後は、一般の方に伝えていくのをライフワークにしたいと考えています」。青木さんは穏やかにそう語りました。



仙台駅近くのビル20階にある献血ルームでは、大きな横揺れにより、重い献血ベッドが室内を激しく移動した



血小板製剤用保管庫が転倒した作業室。地震の衝撃で、仙台市にある血液センターでは、さまざまな機器が破損した

Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

Area News



1本につき71円が小児がん支援に 献血ルームでレモネードスタンド



山形県赤十字血液センターでは、献血ルームSAKURAMBOにて、12月16日～28日、小児がん支援を目的に「レモネードスタンド」を実施しました。1本200円の売上のうち、71円を小児がん支援金として山形大学医学部小児科に寄付する企画で、合計696本、4万9416円が集まりました。中には家族や友人の分まで購入する方や、献血可能日が来ていないのにレモネード購入のためだけに足を運ぶ方も。献血にご協力いただいた血液が、がん治療にも役立っていることを知っていただくきっかけにもなりました。



ボランティアや児童、親子向け… 阪神・淡路大震災の教訓も胸に、防災訓練



日赤香川県支部では、阪神・淡路大震災から31年を迎えた1月17日、防災ボランティア実践研修会を開催しました。登録ボランティアを中心に44人が参加し、災害時に次々と発生する事象に向き合い即時に判断するグループワークでコミュニケーションの重要性を再確認した他、ロープの結び方などの実技を通じて、災害現場で求められる技能のスキルと知識を深めました。(1)

同日、愛媛県支部は、松山市立三津浜幼稚園にて、幼児向けの防災セミナーを開催しました。青少年赤十字防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん!」を使用した講習では、分かりやすいイラストで楽しみながら防災を学習。児童からは、「地震のときは先生のいう事をよく聞きます」「怖くても勇気をだして行動します」など、頼もしい言葉が聞かれました。(2)

静岡県支部では、1月20日、21日の2日間、防災教育事業の指導者養成研修を実施。受講者は、赤十字防災教育の理念や各種プログラムの進め方、指導者としての心構えなどを、講義と演習を交えながら実践的に学びました。修了試験を経て、新たに9人の指導者が誕生。今後、各地で赤十字防災セミナーの担い手として活動し、地域に根ざした防災の啓発を進めていきます。(3)

奈良県支部では、1月25日に「親子で学ぶ ぼうさい教室2025」を開催。参加者は、地震発生時における家の中の危険な場所を知り、命を守るための家具の安全対策を学ぶ「おうちのきけん」や非常食づくり、ビニール袋など身近なもので行う応急手当の方法、日赤が被災者に配る救援物資の確認など、災害時に役立つ知識と技術を学びました。(4)



JRCメンバーを6年ぶり派遣 大韓赤十字社大邱支社との 国際交流事業



日赤山形県支部では、12月22日～27日、大韓赤十字社大邱支社へ県内青少年赤十字(JRC)の高校生9人を派遣し、国際交流を実施。2009年から継続する事業ですが、韓国への派遣はコロナ禍を経て6年ぶり。2003年の大邱地下鉄放火事件(死者192人)を機に作られたテーマパークで火災から身を守る方法を学んだ他、現地の青少年赤十字メンバーと共に貧困世帯へ贈るクリスマスケーキを作るなど交流を深めました。山形のメンバーからは「相手と関わろうとする前向きな姿勢、異なる文化を理解しようとする勇気が重要だと気づいた」などの声が聞かれました。



ひな人形で病院に笑顔を ボランティアによる 大階段のひな祭り



神奈川県・秦野赤十字病院では、2月3日～3月9日正午まで、1階ロビー大階段に170体以上のひな人形が飾られています。このひな飾りは「患者さんに季節を感じてほしい」というボランティアの思いから20年以上続く風物詩。同院には約40人のボランティアが在籍し、普段は総合案内や車椅子点検なども行っています。そのうちの1人、石井礼子さんは「診察や病気の治療に不安を抱えている患者さんやそのご家族に、少しでも笑顔や癒やしを届けられたら」と、願いを語りました。また、患者さんからは「大階段をひな壇に見立てての展示は華やかで、毎年楽しみ」といった感想が聞かれました。

常任理事会開催報告

令和8年1月23日、令和7年度第9回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、地域医療構想における個別案件について、日本赤十字創立150周年プロジェクトにおける将来構想話会及び推進者対象ワークショップ実施状況についてそれぞれ報告しました。

第107回代議員会開催公告

3月19日(木)、午後2時30分から新霞が関ビル「全社協・瀨尾ホール」(東京都千代田区霞が関3丁目3番2号)において第107回代議員会を開催し、下記の事項を付議いたします。

令和8年3月1日

記

第1号議案 役員の出選について
第2号議案 令和8年度事業計画について
第3号議案 令和8年度収支予算について



救急法奉仕団員の人命救助行為に表彰 高校生の救急法講習や 外国人指導員の養成も



秋田県赤十字救急法奉仕団員田口昇さんは、昨年7月、アメリカ発日本行きの飛行機に搭乗中、傷病者発生に伴い医療従事者を求める機内アナウンスを聞いて、看護師をしている娘と共に駆けつけ、救命処置を実施しました。飛行を続ける機内での処置を長時間継続し、救急法指導員としての行動が高く評価され、日赤の清家篤社長は「人命救助表彰状」を授与。1月17日に秋田県支部で行われた同奉仕団創立40周年の記念式典にて、表彰状が贈呈されました。(1)



京都府支部では、1月21日に京都翔英高等学校にて、3年生約180人に向けて救急法講習会を実施。「身のまわりの人の命をどう守るか」をテーマに、胸骨圧迫やAEDの使い方を指導し、生徒から「命を救う責任を感じた」などの声が寄せられました。(2)



愛知県支部は、1月25日、市民の7.6%が外国人籍である西尾市と支部が連携し、外国人住民を対象に救急法指導員の養成講習を行い、12人が参加しました。受講者は10日超の研修と試験を受け、言葉の壁を越えて救命を普及する指導員を目指します。(3)

“日赤トリビアクイズ”に答えてプレゼントを当てよう!

PRESENT!!

Quiz

Q. 大災害が起きた「その時」、命を守るために必要な力は「自助」と「共助」です。次のうち、「自助」の意味は?

A: ご近所や地域どうしが自律する力
I: 避難所で自分のことを自分でやる力
U: 自分自身と家族の命を守る力

ヒントは右の二次元コードから▶▶▶

プレゼント

10名様に当たる!

日赤サービス nisseki service Co., Ltd. オンラインショップはこちら

日赤の車載用防災セット

非常用トイレ、長期保存水など車に常備しておきたい防災アイテム16点がこの1箱に!

プレゼント希望者は右の二次元コードからご応募ください。
応募締め切り: 2026年3月31日(火)
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

赤十字NEWSオンライン版はコチラ▶

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!



ウクライナってどんなところ？

東はロシア、西はポーランド、スロバキア、ハンガリーなどと接し、国土は日本の約1.6倍。古くは、ロシア帝国やソビエト連邦の支配下に置かれ、1991年のソ連崩壊に伴い、独立国に。人口は約3900万人(2025年年央推計/国連経済社会局)と言われるが、2022年から続く武力紛争により、ウクライナ政府による発表は止まっている。紛争激化前は、ヨーロッパの穀物生産の約10～15%を担い、「ヨーロッパの穀物庫」とも呼ばれていた。

ウクライナ・リハビリ支援 日本のハンドブックがもたらす希望

日赤はウクライナ赤十字社(以下、ウクライナ赤)が行うリハビリテーション事業を支援し、その取り組みは2025年12月号の本コーナーでもお伝えしました。今回は、現地に駐在する日赤職員から見たウクライナの現状をお伝えするとともに、ウクライナの人々の声に耳を傾ける中で生まれた、リハビリテーション・ハンドブックについてもご紹介します。

毎日の「停電」「空襲警報」 非常事態が日常となった ウクライナでの生活

2022年2月の紛争激化から4年。終わりの見えない人道危機の中で、国際赤十字と日赤によるウクライナ支援は続いています。首都・キーウに駐在する日赤ウクライナ現地代表部の芳原みなみさんは、厳しい冬を迎えた現地の状況をこう話しました。

「キーウでアパート暮らしをしています。昨年10月くらいから毎日、断続的な停電が起き、ひどいときは半日以上電気が来ないことも。住んでいる場所を登録しておけば、その区域がいつ停電するのか事前にかかるアプリがあり、市民はそれを利用して、電気が来ているうちにシャワーを浴びたり携帯を充電したりと、電気事情に合わせた生活を送っています。暖房は、ガスを利用したセントラルヒーティングシステムである程度まかなえますが、ガスの供給が止まってしまったときは暖房もなくなるので、厚着をして、さらに布団を被って、なんとか寒さをしのいでいます」

空襲警報が鳴り響けば、地下のシェルターや壁2枚を隔てたセーフティエリアへ避難し、じっと警報の解除を待つ生活。今年1月にも、東部ハルキウ州で大規模な攻撃があり、ウクライナ赤の緊急対応チームのボランティアが、政府と連携し、被災者支援や捜索活動を行いました。こうした中、紛争だけがをした人々や退役軍人など、リハビリを必要とする人の数は増える一方。また、

脳卒中や心疾患などで入院した患者さんが、十分なリハビリができずに病床を空けるために退院を促され、自宅に戻っても適切なケアを受けられないといった状況も。ウクライナ赤は、これまでの訪問リハビリに加えて、一般の人々にも、リハビリトレーニングの正しい知識を普及する活動を始めています。

日赤の理学療法士と 現地スタッフが 力を合わせて作ったハンドブック

ウクライナを支援する国際赤十字の中で唯一、理学療法士を派遣してリハビリ支援を行っている日赤。最初の派遣は2023年1月、そこから3年を経て、今回、リハビリテーション・ハンドブックが誕生しました。きっかけは、北海道・栗山赤十字病院から派遣された理学療法士・鈴木聡子さん。

「ウクライナのリハビリは旧ソ連時代の医療スタイルの影響を受け、近代的なリハビリの知識や技術を持つ理学療法士は、まだ人数が少ないのが実情です。この状況でリハビリの成果を出すには、一般市民の知識向上が重要です。ゼロから教材を作るのは時間も労力もかかりますが、日本のハンドブックを翻訳して活用できればと考え、現地スタッフに提案しました」(鈴木さん)

元になったのは、日本理学療法士協会が発行する「理学療法ハンドブック」。18冊のシリーズの中から、ウクライナ赤が選んだ5冊に絞って、翻訳が進められました。

「和式トイレや座布団といった、日本の生活様式で描かれている表現や、日本の福祉制度に基づいた表記をウクライナ向けに修正。ウクライナ赤、日本理学療法士協会とのやり取りが数十回に及び中、日本に留学経験のある現地スタッフ・アリナさんの協力で、英語に変換することなく、日本語から直でウクライナ語に翻訳してもらえたことは幸いでした。治療法に関しては、現地の理学療法士の確認も取りながら進めましたが、現地スタッフの『欧米式のリハビリに移行したい』という要望が強かったのは印象深かったです」と鈴木さん。翻訳したアリナさんは、「日本とウクライナには多くの文化的違いがありますが、福祉制度以外はほとんど修正の必要がなく、ウクライナでも通用する内容なので驚きました。このハンドブックは今後、ウクライナの国民に大切にされ、日常生活に活用されていくと確信しています」と、語ります。また、実際にハンドブックの活用をスタートさせたウクライナ赤の職員、テティアナさんは次のように述べました。

「紛争によって医療やリハビリサービスを受けることが困難な状況が続き、人々は身体機能を維持するための実用的な知識を必要としていました。このハンドブックは、自らの力で移動したい方、病気から回復して健康的に生きたい方の支えになります。日赤が、その経験と知識を共有してくれたことに感謝しています」

これからもウクライナ現地のニーズに合わせた支援を日赤は続けていきます。



ウクライナで国際赤十字やウクライナ赤と連携し、避難民支援などの協議を重ねる芳原さん



ウクライナ赤の訪問リハビリに同行し、家庭でのリハビリ実施をサポートする鈴木さん(左)



完成したハンドブックを手に笑顔になる、ウクライナ赤のリハビリ支援チーム(左から2人目がテティアナさん)